第35回　日本女性医学会学術集会

W-095

都市センターホテル＋WEB、2020.11.21-12.11

未婚女性の選択肢：社会的妊孕性温存治療（卵子凍結）についての現状

浅井淑子、森下みどり、貫井李沙、小宮慎之介、姫野隆雄、井上朋子、森本義晴

HORACグランフロント大阪クリニック

【目的】当院では，女性の晩婚化，晩産化に対する社会的ニーズにこたえるため，IVF の技術を用いた社会的卵子凍結治療に対応している．今回当院での社会的卵子凍結治療を希望した患者について検討・報告し，現代社会で求められる生殖医療の役割について考える．
【方法】2017 年1 月～2020 年6 月での社会的卵子凍結希望
者について，患者背景，治療の実施の有無，治療成績，治療を検討した心理背景等について問診やアンケートなどを元に解析した．
【成績】対象者は90 名，平均年齢38.7 歳．パートナーあり30 例，うち婚姻関係あり6 例だった．治療を実施したのは52 例（57.8%），平均採卵回数1.48 回，卵子凍結数（中央値）9 個．全ての卵巣刺激・採卵処置・卵子凍結は安全に実施され，重篤な副作用は認めなかった．
【結論】患者背景は多岐にわたるも，概ね40 歳の年齢を意識して受診，将来の為卵子凍結を考慮する症例が多かった．20 例（22.2%）が，産婦人科医師や助産師からの提案が契機となっており，我々産婦人科医の果たす役割の重要性が示唆された．
全ての卵子凍結は安全に実施された．治療実施・未実施に関わらず，患者の満足度は高く，今後の人生や妊娠についてより具体的に考えるきっかけになっていた．社会的卵子凍結は，その実施は慎重に検討しなくてはならないが，日本女性の抱える社会背景を考慮すれば，その潜在的要求は大きくまた我々産婦人科医の果たす役割も重要であると思われた．